

アカマツ幼木調査報告～「それぞれのゆくえ調べ」を中心に～

会では保全活動をしているアカマツ林の中で、次世代のアカマツが育っているか把握するため、幼木について2種類の調査をしています。

2007年に開始した「アカマツ幼木個体数調査」は、林内に、連続する2m×2mの5区画を2カ所つくり、各区画の中で、アカマツの数を数えています。

アカマツは光を好むので、区画を設置するとき、上に木がない場所を選びました。当時の写真を見ると、地表にはその年発生した芽生えから概ね5年未満程度のアカマツが、ぱっと見、まばらな草のようにありました。

年一度の調査の折には、他の植物や腐葉土を好まないアカマツのために、区画内のアカマツ以外の植物を刈り、地表の落ち葉を取り除いています。

2009年に過去3カ年の調査を振り返ったとき、「各区画の中のアカマツの数の変化はわかるけれどそれは前から生き残っているもの？新たなもの？どのように成長しているの？」など気になることが出てきました。（会報2009年7月号掲載）

それで2009年秋から年1回、個体数調査の時、10ある区画のうちふたつの区画で各アカマツがどのような消長をたどるかの調査を「それぞれのゆくえ調べ」と題して実施しました。

この結果を中心に、アカマツ林次世代の現況について報告します。

1. アカマツ幼木個体数調査報告

まず、従来から実施している個体数調査の結果を見ると（図1）その特徴は以下の内容でした。

- 5年間とも区画4が最も個体数が多い。
- 全区画内幼木総数は651（2007年）、688（2008年）、408（2009年）、438（2010年）、399（2011年）、465（2012年）と減少傾向に推移した。

2. 「それぞれのゆくえ調べ」報告

■ 方法

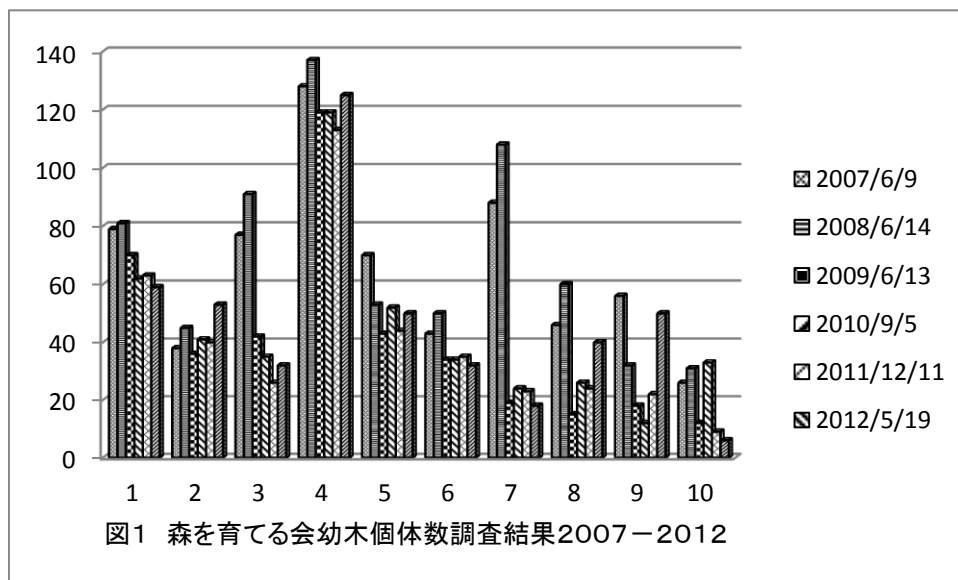
区画2と区画7の中のアカマツに個体番号票をつけ、その高さを計測しました。

票は園芸用名札を切ったものに、個体番号を油性ペンで書いて作成しました。幼木への結びつけは園芸用のタイを使用しました。

区画2と7を選択したのは、踏みつけ等の被害を受ける可能性がより高いと思える、5つ連続した区画の両端を避けること。ひとつが踏み荒らしなどにあっても、もうひとつ調査区が残って継続できる、という安全性のためでした。

そして2012年までには区画2は57、区画7では33まで番号を振りました。

これらの個体を2009年当時の疑問に沿って見ていきます。



■ 2009年にあったアカマツ幼木のゆくえは？

まばらにあったアカマツは区画2で2個体（調査時の草刈り中に切断2）、区画7で3個体（切断1、枯死2）が消失しました。

しかし、多くが表1のように生き残り、高さを伸ばしています。

表1 2009年-2012年 アカマツ幼木の生残と伸長

	2009年の 個体数	うち2012 年まで生 残数	生残した個 体の伸長 平均(cm)
区画2	35	33	17.4
区画7	14	11	11.2

また、図2、図3で分かるように区画2は2009年は草地か裸地のようでしたが2012年にはアカマツがしっかり育っています。

■ 2010年以降生まれた幼木のゆくえは？

では、その後、すでにアカマツの若い先輩達がいるところに生まれた赤ちゃんたちはどのようなゆくえをたどっているのでしょうか。

区画2では表2のように多くが生き残っています。

消失の原因は区画2では切断。区画7ではすべて1年後の枯死です。

表2 2010年以降誕生したアカマツの生残と消失

	2010年以 降の出現 数	うち2012 年まで生残 数	消失数
区画2	22	21	1
区画7	19	13	6



図2： 区画2 2009年12月9日

■これからどうなるのだろうか？

現在、2m×2mの狭い中に、区画2は約50のアカマツがありますが、これがそのまま直径20cmや30cmの木になるのは無理なことです。

昭和30年代ころまでは、たきつけにしたりするため、暮らしの中で間引いたりすることが自然と行われていたと思います。

しかし現代は生活の用がないため、このまま密度が高くなって枯死するのを観察するのか、あるいは密度を考えて間引いていくのか、考える必要が近いうちに出てくるでしょう。

アカマツは大きくなり始めると早いもので例えば区画7の隣の区画6では、2009年に130cmくらいの高さだったアカマツが現在2mを超えています。

3. ふたつのアカマツ幼木調査の振り返り

個体数調査もゆくえ調べも、方法は容易です。また、アカマツという、木自体は身近だけれど、その幼木はふだん注意して見る機会が少ないため、はじめて幼木調査に取り組む人には驚きがあります。

会員だけで実施するときもありましたが、活動説明会に参加した市民の方々、九州大学の学生さんと実施する年もありました。その折は、芽生えのかわいらしさに感動し、アカマツはたくさん種子を生産し、木に育つのはわずかと一緒に実感する楽しい時間でもありました。

調査の数字から、拙く考えてみましたが、改めて専門家を招き、考える機会をもつ時期かもしれません。希少な油山のアカマツ林の魅力と保全がすすむとよいですね。（世話役/柴戸）



図3： 区画2 2012年5月19日